

Title	「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性：(2)共通の詩行について その1
Author(s)	安藤, 幸江
Citation	Osaka Literary Review. 12 P.55-P.66
Issue Date	1973-12-25
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25727
DOI	10.18910/25727
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性

—(2)共通の詩行について—その1

安 藤 幸 江

はじめに

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」(以下略称、「没落」)の同一性と差異性の(1)として、テーマについては、本誌 *Osaka Literary Review* No. XI で発表しました。⁽¹⁾この小論では、(2)として、共通の詩行について考察します。これら両詩には同じ表現、あるいは、よく似た表現がありますので、それらを共通の詩行とし、その相違点を比較研究することにより、両詩の特性を明らかにしたいと思います。この共通の詩行は160行ほどあり、一度には発表できませんので、ここでは、その約3分の1にあたる60行ほどについて述べることにします。便宜上、三つに分節、検討して責を果すことにします。

1

「ハイピアリアン」第一巻、1—5行と「没落」第一巻、292—300行

「ハイピアリアン」冒頭の3行は「没落」の第一巻、294—296行に登場します。以下に両詩の各該当箇所を引用しましょう。

Deep in the shady sadness of a vale __

o Far sunken from the healthy breath of morn,

3 Far from the fiery noon, and eve's one star __

Sat gray-hair'd Saturn, quiet as a stone,
Still as the silence round about his lair ;

(*Hyperion*, Book I, 11. 1—5)

side by side we stood,

(Like a stunt bramble by a solemn Pine)

294 Deep in the shady sadness of a vale,

o Far sunken from the healthy breath of morn,

Far from the fiery noon and Eve's one star,

Onward I look'd beneath the gloomy boughs,

And saw, what first I thought an Image huge,

Like to the Image pedestal'd so high

In Saturn's Temple.

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 292—300)

この引用文中、丸印および下線は筆者によるものです。また、詩行の頭の小さい丸印は、全く同じ詩行であることを示しています。これらのことは以下の引用文の全てについても同様です。

御覧の通り、「ハイピアリアン」においては、問題の3行はコンマで次の行とつながり、次の行は“Sat gray-hair'd Saturn”となっています。この3行で述べられている木々の鬱蒼とおい茂る深い谷の奥は、あきらかに、サターンの枯坐している場所です。ところが、「没落」においては、この3行はピリオドで終わっています。そしてその前には“side by side we stood”の行があります。ここの“we stood”の“we”とは、モネータという詩人を案内する巫女と詩人の二人のことで、彼らは、“Deep in the shady sadness of a vale”に相並んで佇んでいるのです。やがて、詩人達はほの暗い枝の下にサターンの巨大な姿を見ます。当然そこが、サターンの居場所であるとはわかるのですが、“Deep”以下の3行は直接にはサターンとは結びついてはいません。それだけ、この詩行のもつ緊迫した力強い魅力が弱まっているように思われます。

2

「ハイピアリアン」第一巻、7—25行と、「没落」第一巻、310—330行

「ハイピアリアン」の第一巻、7—25行は「没落」の第一巻、310—330行に相当します。この箇所を三つの部分に分割して、少しずつみていきましょう。

〔I〕まず、「ハイピアリアン」からは

- No stir of air was there,
Not so much life as on a summer's day
◦ Robs not one light seed from the feather'd grass,
But where the dead leaf fell, there did it rest.
(*Hyperion*, Book I, 11. 7—10)

を取り出したいのですが、それに対する「没落」は

- No stir of life
Was in this shrouded vale, not so much air
As in the zoning of a summer's day
◦ Robs not one light seed from the feather'd grass,
But where the dead leaf fell there did it rest.
(*The Fall Hyperion*, Canto I. 11. 310—314)

というものであります。「ハイピアリアン」で“*No stir*”から“*the feather'd grass*”まで、1行半で歌われていることが、「没落」においては2行半になっています。これらの詩行を細かく分析、検討しますと、以下の三点のことが指摘できます。

第一に、「ハイピアリアン」では“*air*”と“*there*”とが韻を踏んでいます。すなわち、*inner rhyme* をなしています。その結果、この詩行は軽く流れるような感じですが、ところが、「没落」では“*air*”の代りに“*life*”が入り、“*life*”の代りに“*air*”が入っています。すなわち、「ハイピアリアン」と「没落」では“*air*”と“*life*”の全き位置変換が看取されます。また、「ハイピアリアン」では“*there*”だったのが、「没落」では“*in this shrouded vale*”と説明的になってきます。この結果、「没落」では“*air*”と“*there*”の *inner rhyme* も消え失せてしまって、軽く流れるような感じから、“*life in this shrouded vale*”と重厚なものになりまし

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアン没落」の同一性と差異性

た。しかしながら、この箇所は、風のそよぎ一つなく、空気が淀んでいる情景、いわば「鵲巢貫頂」ともいうべき静の境を表現しているのですから、「没落」の描写の方がより適切に思われます。

第二に、「ハイピアリアン」8行目の“on”の一語は、「没落」312行目で“in the zoning of”と言い換えられて、これまた説明的です。“zoning”の意味を調べてみますと、

zoning from Zone, 3. *Geol.*, etc. To divide into zones ;
to distribute or arrange in zones : see Zone *sb.* 7.
Hence Zoning *vbl. sb.* and *ppl. a.* (*O. E. D.*)

とあり、ひき続いて、キーツのこの行が引用してあります。ここから、この“zoning”はいささか持って回った感じを抱かせるものの、殆ど zone と同義とみなしても大過ないでしょう。

第三に、「ハイピアリアン」では8行目の“life”と9行目の“light”の位置が近く、頭韻の効果が少しはありましたが、これに対して、「没落」にあっては、それらは離れてしまいますので、頭韻の効果は望むべくもありません。以上、三点です。

〔II〕次に、「ハイピアリアン」では、

- A stream went voiceless by, still deadened more
12 By reason of his fallen divinity
Spreading a shade : the Naiad 'mid her reeds
- Press'd her cold finger closer to her lips.
(*Hyperion*, Book I, 11. 11—14)

ですが、「没落」でそれに該当するものは、

- A tream went voiceless by, still deaden'd more
316 By reason of the fallen Divinity
Spreading more shade : the Naiad 'mid her reeds
- Press'd her cold finger closer to her lips.
(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 315—318)

です。

「ハイピアリアン」12行目において“his fallen divinity”と“his”とあるものは、「没落」316行目では“the”となります。これは、E. De Selincourt が指摘していますように、詩の構成が変わったので、必然的に起った変化でしょう。⁽²⁾つまり、「ハイピアリアン」は純粋な物語で、今までのところ、サターンだけが登場しています。ところが、「没落」では「私」、すなわち、詩人と、モネータが登場し、サターンを眺めているのです。その意味で、いわゆる、劇中劇です。

「ハイピアリアン」13行目“spreading a shade”は、「没落」317行目で、“a”が“more”になっています。これは意味を強めようとしたことと、次の行の“closer”と対応させて、比較級を使ったと考えられます。しかし、意味の上では“a”でも十分だと思います。勿論、この場合の“a”は“some”の意と解します。

〔Ⅲ〕最後の部分を引用します。

- Along the margin-sand large foot-marks went,
 16 No further than to where his feet had stray'd,
 And slept there since. Upon the sodden ground
- His old right hand lay nerveless, listless, dead,
 Unseceptred; and his realmless eyes were closed
 - While his bow'd head seem'd list'ning to the Earth,
 - His ancient mother, for some comfort yet.
 - It seem'd no force could wake him from his place;
 But there came one, who with a kindred hand
 - Touch'd his wide shoulders, after bending low
 - With reverence, though to one who knew it not.

(*Hyperion*, Book I, 11. 15—25)

- Along the margin sand large footmarks went
 320 No farther than to where old Saturn's feet
 Had rested, and slept, there how long a sleep!
Degraded, cold, upon the sodden ground
- His old right hand lay nerveless, listless, dead,

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアン没落」の同一性と差異性

- Unsceptred ; and his realmless eyes were clos'd,
○ While his bow'd head seem'd listening to the Earth,
○ His ancient mother, for some comfort yet.
○ It seem'd no force could wake him from his place ;
But there came one who with a kindred hand
○ Touch'd his wide shoulders, after bending low
○ With reverence, though to one who knew it not.

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 319—330)

「ハイピアリアン」16行目の“his feet”の“his”が「没落」320行目で、“old Saturn's”と説明的な言い回しになっています。この異同は「私」、すなわち、詩人が見て語っているからです。

更に、「ハイピアリアン」の同じ行の“stray'd”は「没落」では行をあらためて、しかも“rested”と表現が変えられています。この“rested”は、stray した後で、rest したと考えられるので、この方がより奥深く、二重の意味の諦観を匂わせているように思います。

次行の「ハイピアリアン」では“sleep”と“slept”と意味が二重化します。加えて“how”という感嘆詞に先導されていることは、表現を情念過多にし、甘いものになっています。感嘆詞をよく使うのはキーツの初期の特色です。

一行下って、「ハイピアリアン」18行目は“His old right hand lay nerveless, listless, dead, / Unsceptred”と形容詞が4つ付いていますが、「没落」の場合、更にこれに“Degraded, cold”と2つも加わって、形容詞の羅列という気を起こさせます。さきの17行目の表現とこの表現からして、「没落」では、意識の分化の進展とは言え、その過剰、及び、表現の冗長の感を免かれません。

以後の詩行は、御覧の通り、全く同じ行が殆んどで、相違があっても、コンマの有無，“ed”と“d”の違いだけです。ただ、興味あるのは「ハイピアリアン」で“ed”だったのが、「没落」で“d”に直された箇所がこの他にも、いくつかあることです。

3

「ハイピリアン」第一巻, 37—71行と「没落」第一巻, 339—371行

第三に対応するのは, 「ハイピリアン」の第一巻, 37—71行と「没落」の第一巻, 339—369行です。ここは, 王位を失なって悲しんでいるサターンのところに, 太陽の神ハイピリアンの妻, スィーアがやって来て, 彼に話しかけるところです。前半, 後半に区分して逐次考察していきます。

前半。最初の6行は全く同じ詩行です。

- There was a listening fear in her regard,
- As if calamity had but begun ;
- As if the vanward clouds of evil days
- Had spent their malice, and the sullen rear
- Was with its stored thunder labouring up.
- One hand she press'd upon that aching spot
Where beats the human heart, as if just there,
Though an immortal, she felt cruel pain :
- The other upon Saturn's bended neck
- 46 She laid, and to the level of his ear
Leaning with parted lips, some words she spake
In solemn tenour and deep organ tone :
- Some mourning words, which in our feeble tongue
- 50 Would come in these like accents ; O how frail
To that large utterance of the early Gods!
'Saturn, look up!—though wherefore, poor old King?
' I have no comfort for thee, no not one :
- 54 ' I cannot say, "O wherefore sleepest thou?"
- ' For heaven is parted from thee, and the earth
' Knows thee not, thus afflicted, for a God;
' And ocean too, with all its solemn noise,
- ' Has from thy sceptre pass'd ; and all the air
' Is emptied of thine hoary majesty.

(Hyperion, Book I, 11. 37—59)

- There was a listening fear in her regard,
- As if calamity had but begun ;
- As if the vanward clouds of evil days
- Has spend their malice, and the sullen rear
- Was with its stored thunder labouring up.
- One hand she press'd upon that aching spot
Where beats the human heart ; as if just there __
Though an immortal, she felt cruel pain ;
- The other upon Saturn's bended neck
- 348 She laid, and to the level of his hollow ear
Leaning, with parted lips, some words she spoke
In solemn tenor and deep organ tune ;
- Some mourning words, which in our feeble tongue
- 352 Would come in this-like accenting ; how frail
To that large utterance of the early Gods! __
'Saturn ! look up—and for what, poor lost king?
I have no comfort for thee, no—not one ;
- (356) I cannot cry Wherefore thus sleepest thou :
 - For heaven is parted from thee, and the earth
Knows thee not, so afflicted, for a God ;
The Ocean too, with all its solemn noise,
 - Has from thy sceptre pass'd ; and all the air
Is empied of thine hoary Majesty.

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 339—361)

その後も3行は殆んど即応していて、たいした変動はありません。「ハイピアリアン」46行目の“his ear”というのが「没落」348行目では“his hollow ear”となっていて、少し説明的です。勿論、これで以って空ろな大きな耳を言い表わしているのですが。この部分で注目すべきものとしては、「ハイピアリアン」50行目“these like accents”が、「没落」では“this like accenting”とあります。“accents”と“accenting”の各々を辞書をひもとき、対置してみますと、

accent *poet* A significant tone or sound ; a word ;
in *pl.* speech, language ; including both the tones
and their meaning. (O. E. D.)

accenting *vbl. sb. f.* Accent *v.* + *ing* l. A pronouncing with accent or stress. 3. Uttering or pronouncing; intoning. (*O. E. D.*)

このように “accents”の方が雅語、詩的な言葉です。

更に、同じ行で、「ハイピアリアン」は “O how frail” ですが、「没落」では “O” が影を潜めます。“O” という間投詞を使うのはキーツの初期の欠点です。それが姿を消すのは良いことでしょう。

ちなみに、スィーアの言葉は、「ハイピアリアン」では各行ごとその頭に引用符が付けられているのに反し、「没落」にあっては最初の行と最後の行だけで一層すっきりしたものになっています。

次に、「ハイピアリアン」でそれから二行下った52行目，“though wherefore, poor old King?” ですが、それは「没落」354行目，“and for what, poor lost king?” に呼応します。意味上の変化はそれほどないのですが、前者の “though wherefore” は音の流れに重い感じを帯びさせています。それに対し，“and for what” は軽いものです。「ハイピアリアン」では “wherefore” がこの52行目と54行目との2箇所で使用されているのですが、ここ「没落」になって “wherefore” は “for what” に別表現されて、繰り返しが避けられたと思われまます。

そして、また、この “poor lost” という「没落」の表現は「ハイピアリアン」の “poor old” (52行目) という、ありきたりの語句の踏用を回避しようとしたものだと言ってよいでしょう。しかし、セリンコートがこの行への註で言っていますように、⁽³⁾ “poor old” はシェークスピアの「リア王」においてリアの epithet として、何度も効果的に使われています。単に王位をなくしたというだけではなく、年老いたものの哀れさ、惨めさという老年のもつ悲劇性も、リア同様、サターンにとっても重要な要素です。ちなみに、サターンが年をとっていることを表わす言葉を拾ってみましょう。

「ハイピアリアン」については、

“gray-hair'd Saturn” (Book I, 4)

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアン没落」の同一性と差異性

- “His old right hand” (Book I, 18)
“thine hoary majesty” (Book I, 59)
“old Saturn” (Book I, 89)

と、四度出てきます。

「没落」の場合では、

- “old Saturn’s feet” (Canto I, 320)
“His old right hand” (Canto I, 323)
“thine hoary Majesty” (Canto I, 361)
“old Saturn” (Canto I, 400)
“some old man” (Canto I, 440)

の五度です。最後の “some old man” は嘆き悲しむサターンの姿を地上の老人に喩えているのです。“old” の意味は、このように重く、深刻なのです。

次にすすんで、「ハイピアリアン」54行目の “say” は「没落」356行目、“cry” となり、意味が強められています。また、同行の「ハイピアリアン」の “O” は「没落」では削除されます。

「ハイピアリアン」56行目、“thus” は「没落」での照応は “so” ですが、たいした相違ではありません。これで前半の検討を終わります。

後半の部分を引用しましょう。

- 60 ‘ Thy thunder, conscious of the new command,
◦ ‘ Rumbles reluctant o’er our fallen house ;
◦ ‘ And thy sharp lightning in unpractised hands
◦ ‘ Scorches and burns our once serene domain.
64 ‘ O aching time! O moments big as years!
‘ All as ye pass swell out the monstrous truth,
‘ And press it so upon our weary griefs
◦ ‘ That unbelief has not a space to breathe.
‘ Saturn, sleep on:—O thoughtless, why did I
‘ Thus violate thy slumbrous solitude?
‘ Why should I ope thy melancholy eyes?
‘ Saturn, sleep on ! while at thy feet I weep.’

(*Hyperion*, Book I, 11. 60—71)

- 362 Thy thunder, captious at the new command,
o Rumbles reluctant o'er our fallen house;
o And thy sharp lightning in unpracticed hands
o Scorches and burns our once serene domain.
- 366 With such remorseless speed still come new woes
o That unbelief has not a space to breathe.
Saturn, sleep on: Me thoughtless, why should I
o Thus violate thy slumbrous solitude?
o Why should I ope thy melancholy eyes?
Saturn, sleep on, while at thy feet I weep.—

(*The Fall of Hyperion*, Canto I, 11. 362—371)

簡単ながら、コメントを加えておけば、まず、「ハイピリアン」60行目の“conscious of”は「没落」においては“captious at”となって、意味が強化されています。

次に、「ハイピリアン」64—66行の三行は、「没落」の366行一行に圧縮されて歌われています。しかも前者では“O aching time! O moment big as years!”という具合に、共々“O”と感嘆符を使い、甘く、初期の欠点を露呈しています。更に、例証を挙げれば、68行目で“O”，71行目で感嘆符と、約言して、感情に流れている感じですが。その点、「没落」は“O”や感嘆符を一切使わず、かくして、情に棹ささず、落ち着きを保っているのに、却って、368行目と370行目の“why should I”のshouldの情感が、甘さの重ねを厚くすることなく、生きてくるように思われます。

お わ り に

以上、両詩の共通の詩行の約3分の1を比較検討し、その相違点を指摘してきましたが、おおよそ、次のようなことが定言できると思います。第一に、「没落」は「ハイピリアン」に比べて、説明的であることです。これは「ハイピリアン」が純粋な物語で、古典的な叙事詩であるのに対して、「没落」は「私」によって物語が語られるという近代的なそれであ

「ハイピアリアン」と「ハイピアリアン没落」の同一性と差異性

ることに由来するのでしょうか。第二には、「没落」では、できるだけ同じ語の繰り返しを避けようとしていることです。第三には、例外はありますが、感嘆詞及び感嘆符の使用が極力押えられ、知的になっていることです。「ハイピアリアン」では、これらは余りに度々使われました。

これで共通の詩行——その1の小論を終わります。ひき続き、残りの共通の詩行について、比較検討していきたいと思っています。

註

- (1) 「ハイピアリアン」と「ハイピアリアンの没落」の同一性と差異性——(1)テーマについて、*Osaka Literary Review*, No. XI, (1972年秋発行), pp.78—88.
- (2) E. De Selincourt (ed.), *The Poems of John Keats* (8th ed; London : Methuen, 1961), p.552.
- (3) *ibid.*, pp.496—497. 尚、原詩の引用は H. W. Garrod (ed.), *The Poetical Works of John Keats* (Second ed.; Oxford : the Clarendon Press, 1966) によります。